

風になひき波にゆられてはる／＼と

ゆくへも知らぬわが身なるらむ

月の夜

鶯

水

夏すぎ秋も
月も今霄の
なれし小杖を
上野の奥を
聲もおしまず
月にうらみを
彼方の人へ
思ひをいつか
うつして見せん

なかばなる
さひしさに
友として
とめ来れば
草に木に
なく虫の
もらすごと
われも猶
恐ばずに
すべもがな

碓氷の紅葉

東くめ子

人の巧と神の業
梢の色の薄からぬ
げに山姫の織かけし
思ふまもなく隧道の
岩さり開き山を裂く
湯氣の力に登り行く
俄に夜は明け渡り
木々の紅葉にうつる
見る目まはゆく照まさる

紅葉の錦うつくしと
あやめも分ぬ闇にいる
力は神かあなあやし
車も人のたくみとは
朝日にあらぬ夕づく日

夢

敏子

ゆめと知りせよとこしへに
さめざらましを敷妙の
まくらの下は海なれと

君を見るめは生ひやらて

磯うつ波の音高く